

色相・明度・彩度

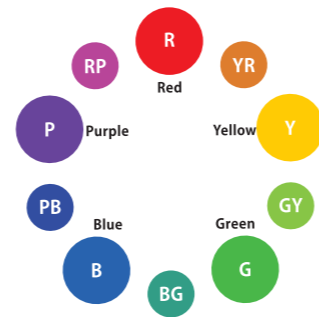
色を日常会話でおおまかに示す時には色名やトーンが便利だが、規則をつくるときにあいまいな表現は好ましくない。これまでは、派手な色は禁止する、などと言っていた例もあるが、これでは誰も従わない。マンセル表色系は、色を整理して記号で表示する方法である。色相 (Hue)、明度 (Value)、彩度 (Chroma) の3つの尺度で分ける。記号や数字で表現すれば、迷うことはない。美術の時間にマンセルや色立体のことを習ったことがあると思うが、ほとんどの人は覚えていない。難しいと思いこんでいる。それは、教え方が下手だったからであり、基本を次のように覚えれば、わかりやすく、とても便利な方法である。

色相/Hue

色相は、文字通り色合いのことである。覚え方は簡単で、最初に基本となる5色を確実に覚える。円を思い描き、上から右回りに、赤 (R)、黄 (Y)、緑 (G)、青 (B)、紫 (P) を配置する。これを、R、Y、G、B、P、と記号で言う。

次にその間を埋める。赤と黄の間は橙であるが、呼び方に法則があつて、次に来る色から言う。つまり、RとYの間はYR、YとGの間はGY、GとBの間はBG、BとPの間はPB、PとRの間はRP、これで一周し、色環の10色を確実に覚えることができる。

各色相は、10段階に分割し、次の色相に近づくにつれて数字が大きくなる。その色相の中心を5とし、例えば最も赤らしい赤を「5R」と呼ぶ。

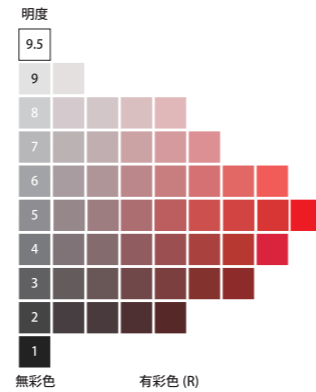


明度/Value

明度は、色の明るさの段階である。無彩色にした場合の段階を10段階に分ける。表現できる色で暗い黒が1.0、明るい真っ白が9.5程度である。中間のグレーが明度5である。

時々、白い方と黒い方の数字を反対に覚えている人がいるが、「明度」なので、光がたくさん当たって明るいほど数字が大きく、光が少ないら数字が小さい、と覚えればいい。

また、無彩色だけが明度で示されるのではなく、色彩はすべて明るさの段階を持っている。彩度の高い黄色は明度8程度で明るく、赤や緑は明度4から5程度で中間である。赤は派手な色だと思われているが、真っ赤な部屋は意外に暗い。また、常緑樹の葉は明度3前後で暗い。



彩度/Chroma

彩度は、色の鮮やかさの度合であり、無彩色の軸からの距離によって決まる。

マンセルの色立体を見た記憶があると思うが、中心軸の上の方が白、下の方が黒で表される。白っぽい色から黒っぽい色までさまざまな色があり、色がちがうのに同じ彩度で表されるので理解しにくい。その色立体の中心の軸が無彩色で、純度が高くなるほど中心から離れ、彩度が高くなる。

色相によって彩度の高さが異なる。色の三属性の中で彩度の概念が最もわかりにくいのではなかろうか。色味が多くなって鮮やかになるほど彩度が高い。赤や黄色は14や15程度まで高い彩度の色があり、青は10程度までしかない。落葉樹の葉が芽吹いた時の彩度は6前後、常緑樹の葉は3前後である。屋外広告物で「鮮やかな色を禁止する」という場合の鮮やかな色とは、概ね彩度10以上の高彩度の色、すなわち、赤から黄色の色相の鮮やかな色を指す。

マンセル表色系の色の呼び方は、「色相 明度/彩度」の順番で書き、例えば純色に近い赤の場合は「5R4/14」と表現し、「ごアールよんのじゅうよん」と読む。マンセル表色系は、色を系統的に表現しているため、例えば「5R4/14」と聞くと、一番赤らしい赤で、中間くらいの明度で、きわめて彩度が高い色、すなわち「真っ赤」だということがわかる。ところが、「DIC-2490」と言ってもほとんどの人が同じような「真っ赤」を想像できない。同様に「10B3/6」と聞くと、やや青紫がかかった青で、やや暗く、色味を感じるが鮮やかではない青、すなわち「紺色」だろうとイメージできる。

